

## 香取遺産

①上空から見た佐原港  
(昭和40年代)

②佐原駅北口に残るコン  
クリート堤



## 水運の物流拠点

vol.179

## 「佐原駅の開通と佐原河港」

日本で初めて鉄道が開通したのは明治5年のことで、新橋・横浜間に開通しました。近年、品川駅や高輪再開発の際に当時の遺構が発見され、その取り扱いが注目されています。千葉県では、明治27年に市川・佐倉間に開通し、その後、成田鉄道株式会社が明治31年に佐倉から佐原まで延伸しました。

当時の佐原は利根川水運の要衝でしたが、鉄道の開通を機に鉄道輸送が増加します。大正14年の年間乗降客数は約48万人、同年の貨物発送量は約4万3千トンでした。主に米・しょうゆ・酒・木材などを扱い、貨物発送量は当時県内第3位で、貨物ターミナルとしての性格が強い駅でした。特に輸送の多くを占めた米などの農水産物は、新島地域および茨城県の潮来・鹿島・稲敷方面から船などで集荷し、佐原駅で貨物車両に積み替えて輸送しました。

こうした盛況を受け、昭和22年から26年にかけて、佐原駅の北口に佐原河港(佐原港)が整備されました。長さ200m、幅60mに及ぶ内陸港で、荷物の積み替えの便を図るため設けられました。しかしながら、この間に道路交通網が大きく発展し、市内でも昭和11年に国道51号に初代水郷大橋が開通するなど、陸上輸送が主流となっていました。

取扱量が伸びなかった佐原港は昭和50年に埋め立てられ、跡地は佐原コミュニティセンターや市営駐車場などとして使われています。現在、佐原駅の北口バスターミナル付近から歩道橋にかけて、道路脇にあるコンクリート堤や、市営駐車場との境が、かつての駅構内と港の名残と考えられます。